

## 「文化野球論」(仮) 宣言序説

湯 浅 成 大

### はじめに

いかにも奇妙なタイトルである。「文化野球論」とは何か。(仮)とはどういうことか。宣言だなんてマルクス・エンゲルスでもあるまいし。というわけで、このタイトルに込められた私の意図から最初に説明させていただきたい。

野球を社会や文化の観点から語る論者は山ほどいる。社会学の観点から野球を語れば「野球社会学」であるし、文化の視点から野球を語れば「野球文化論」である。野球は社会的な存在であり、文化の影響と無縁であるわけがないのだから、このようなアプローチは十分説得力を持っている。だが野球が社会や文化に影響を与えるベクトルはないのか。野球における変化が社会や文化の変化の先駆けになることはないのか。社会や文化で野球を語るのではなく、野球で社会や文化を語ることはできないのか。そのささやかな試みがこの小論なのである。したがって文化で野球を語ることが「野球文化論」であるならば、野球で文化を語るという逆のベクトルの場合、言葉をひっくり返して「文化野球論」、文化を語るための野球論としてみたのである。しかしこれはあくまで仮称であって、より適切なネーミングが後日思い浮かぶかもしれない(実際のところあまりいい語感とは思えない)。そこであえて(仮)と付け加えさせてもらったわけだ。さらに宣言とつけたのは、本論文はあくまで端緒であることを表明するためであり、また本論文で何かを確立させたり、結論を出したりすることを目的とはしていないので序説という言葉を用いたのである<sup>1)</sup>。

本論文では、「文化野球論」の可能性を探るために、まず数少ない「文化野

球論」の古典といえるロバート・ホワイティングの著作を批判的に紹介し、次に野球から見たグローバル化を論じる手がかりとして、野球選手のグローバルな移動を研究する石原豊一の著作を検討しながら、いくつかの問題提起を試みたい。

## 1. ロバート・ホワイティング『菊とバット』

『菊とバット』は1977年に出版された<sup>2)</sup>。初版「はじめに」にて、ホワイティングは以下のように書いている。「これは日本人を書いた本である。日本人が心から愛する“野球”というスポーツを通じて、彼らの文化を見つめた本」である。「日本という国を見るのに野球ほど便利な窓」はなく、「日米両国の文化を、知性と感情の両面で比較できる共通の尺度」でもあり、「日本社会に適応するよう、野球がどのように修正されたかを調べてみれば、東洋と西洋の相違点を数多く把握できるに違いない<sup>3)</sup>。まさに「野球を通じて日本の文化を語る本」なのである<sup>4)</sup>。

以下各章の順にしたがってこの本の内容を簡単に紹介することにする。ホワイティングはまず日本の典型的な野球を取り巻く風景を粗描する。日本ではプロ野球だけでなく、高校野球や大学野球にも非常に人気があり、また庶民も草野球やキャッチボールなど日常的に野球に触れていることを紹介する。朝は詳細なデータ満載のスポーツ新聞を読むことから始まり、夕暮れの家庭では絶大な人気を誇り独特の形式美を持つ野球中継が茶の間を独占し、飲み屋の話題の中心はもちろんプロ野球。日本人の日常はあたかも野球中心に回っているかのように語られている<sup>5)</sup>。

次に成績不振にともなう、シーズン途中の監督「休養」を取り上げ、そこで日本的「面子」の重要性を指摘する。続いて日本のプロ野球選手の守るべき規律を列挙して、和と集団主義を基本とする日本のチームの在り方を論じている。ちなみにそこに挙げられている規律とは、選手はチームの一員たるべし、選手はチームのためにプレーすべし、選手はチームの輪と団結を追求すべし、選手は既存のやり方に従うべし、選手は努めて厳しい練習をおこなうべし、といったものである<sup>6)</sup>。

さらに続いて日本のスター列伝である。チームのために酷使をいとわなかった稲尾和久、杉浦忠など過去のエースたち、また過去のエースたちと比較され

て「精神力不足」のレッテルを不当に貼られた江夏豊，異端児金田正一と堀内恒夫，アメリカかぶれと批判されたマッシー村上，そして唯一無二のスーパースター長嶋茂雄たちが彼独自の視点で語られている。特に長嶋茂雄に匹敵するスポーツ界の存在は，ブラジルのサッカー選手ベレしかいないのではないかという指摘には刮目させられた<sup>7)</sup>。日本のプロ野球ファンとチームの関係についても一章費やしている<sup>8)</sup>。そのあとでいよいよ後半は真打外国人選手（ガイジン）についての記述が登場する。

第2次大戦後日本プロ野球に参加したアメリカ人選手は，1951年に巨人に入団したウォーリー与那嶺が最初である。与那嶺は高度な打撃走塁技術で大活躍したが，その彼も大リーグ仕込みの激しいスライディングが日本的でない汚いプレーとして非難された。彼以外の初期のガイジン選手の中には全盛期を過ぎた元大リーガーも少なくなく，彼らは成績が今一つだったこともあって，彼らの尊大さや過大な要求，出稼ぎ気質，ワガママさが格好の非難の的となった。その後1960年代半ばには，ダリル・スペンサー，ジーン・バッキー，ジョー・スタンカといった日本に順応して優勝にも貢献した成功例も出てきたのだが，それでもスペンサーの強烈な殺人スライディング，バッキーのいたずら好き，バッキーやスタンカのブラッシュバックピッチは批判された<sup>9)</sup>。クリート・ボイヤー，ジョージ・アルトマン，ドン・ブラッシングーム（プレイザー）のように日本人から敬意を集めた選手は例外的だった<sup>10)</sup>。もちろん日本プロ野球史上最悪のガイジン（害人）と称されるヤクルトのジョー・ペプトーンのこととも忘れない。以上のようなことをさまざまなエピソードを通じてホワイティングは紹介する<sup>11)</sup>。

ガイジン選手が直面した壁はそれだけではないとホワイティングはさらに続ける。それは野球をめぐる文化摩擦である<sup>12)</sup>。ガイジン選手は日本の人間関係における序列や面子がよく理解できない。また春のキャンプや試合前の練習に象徴される，長く厳しくそして集団的な練習を嫌悪する。アメリカとはやり方が違うし，彼らには練習の自己目的化のように見えるからだ。そうなると文句も多くなり，監督との関係も場合によっては悪くなる。さらに，ガイジン選手にとってショッキングなことは，ガイジンが活躍することを球団やファンは望んでいるけれど，ガイジンがナンバーワンの存在になることは望んでいないことに気づく時だという。特にガイジンがタイトルを取ったり記録を破ったりすることがかつてはタブーだったことを，スペンサーの敬遠騒動に触れながら述

べている。ホワイトティングはこれを日本人の島国根性の表れと知っている<sup>13)</sup>。

最後にホワイトティングは、典型的な日本の球団であり最強の常勝軍団であった読売巨人軍の特徴について紹介し、巨人（特にオーナーの正力松太郎）が戦後どれだけ「真の世界シリーズ」の実現を望み、それがどれほど身の程知らずのことだったかを日米野球の結果を振り返りながら論じて著作を終えている（ここまでが初版に書いてある内容）<sup>14)</sup>。

## 2. 「文化野球論」としての『菊とバット』

1.で紹介した『菊とバット』であるが、これは1976年までに起こった出来事について書いてある本なので、現在から見ると違和感をおぼえる部分もあるかもしれない。けれども1977年の出版時においては、画期的な著作であったのだ。

1番目の貢献は、この本で取り上げられているガイジン選手の不平不満や悪行を文化的不適応という概念によって説明したことである。それまでもそのようなことは事例としては知られていたが、その原因についてはもっぱら個人的資質に帰するものとされ、なぜ彼らは怒りをぶちまけるのか（単に怒りっぽい性格だとして片づけられる）、なぜ彼らは日本のやり方にいちいち反発するのか（単に傲慢で意固地な性格として片づけられる）、その背景については深く考えられてこなかった。それに対してホワイトティングは、外国人選手の文化的不適応という尺度を持ち込んで、日本の当たり前とアメリカの当たり前がいかにかき離れているかという観点から説明したのである。

2番目の貢献としては、日本の野球において外国人選手が感じる違和感と、野球選手でない外国人が日本社会において感じる違和感がいかに共通したものであるかを指摘した点である。外国人にとっては不必要に思われる多数の会議やミーティング、結果以上に重視される手順の順守、わかりにくい人間関係、などは日本のプロ野球にもいたるところで見られるとホワイトティングは言い、彼はそこに日本の文化を見出したのである。

3番目の貢献として、外国人選手という存在が単に一選手として活躍するかどうかだけでなく、日本人選手あるいは日本のチーム（さらにいえば日米両国）との比較で見られる存在だということを明らかにした点である。アメリカ人選手やアメリカのチームが活躍した場合、それに匹敵した活躍を見せる日本人選

手やチームがあれば、日本はアメリカに追いつきつつあると満足し、またアメリカ人選手やチームのパフォーマンスが悪ければ、日本はアメリカを凌駕したと一層満足するということを彼は指摘してみせた。いずれにしても外国人選手(チーム)は、選手個人の問題を超えて論じられるというのである。この点は、そのようなことを言っている当の日本人が、一番気が付きにくいことかもしれない<sup>15)</sup>。

『菊とバットが』文化野球論の先駆的業績であることはいままでもないが、しかし問題点もないわけではない。まずこのタイプの文化論に特有の文化決定論という問題である。『菊とバット』における文化決定論の問題とは、ホワイティングは[完全版]「完全版に寄せて」の中で、この本は「六〇年代から七〇年代の初めにかけて、ぼくが日本で米軍諜報部に勤務したり、上智大学で勉強したり、日本の企業で唯一の“ガイジン”として働いていた当時の経験に基づいている」と書いてあるように、自らの文化的不適應の経験がベースになっている<sup>16)</sup>。おそらく彼は、日本企業の集団主義的性格、組織への滅私奉公の圧力、人間関係の複雑さなどを感じ取り、それを日本プロ野球のガイジン選手が直面している困難に投影したものと思われる。

そのせいか日本人イコール集団主義的というのは所与の前提となっており、日本人は(あるいは日本文化が)集団主義的だからこういうことが起きるといふ説明が非常に多いという印象を受ける(もちろんそこに真実があるからそうなるのだが)。だが、本書には日本文化が本当に集団主義的かどうかの検証はなく、また日本の野球チームは選手を集団主義的な鑄型にはめ込むための練習を行うことで日本文化の集団主義的性格の再生産に貢献しているといった問題設定もなく、さらに仮に日本人が集団主義的傾向を持っているとしても、その練習方法が日本人にとっては勝利をつかむための合理性があるから選択されているという視点もない。極論すれば、ホワイティングは野球を題材にして、日本がいかに集団主義的な社会であるかをひたすら例証しようとしているだけのように見えてしまう<sup>17)</sup>。

他の問題点としては、言葉の定義があいまいなまま日米を対比しているケースがある点である。一例をあげると、ホワイティングは「“ファイティング・スピリット”(中略)といった日本人独特の観念は、アメリカ人には波長が合わない」と書いている<sup>18)</sup>。もちろんアメリカ人にファイティング・スピリットがないということはある程度あり得ない。要は「ファイティング・スピリット」の示す

内容が（ホワイティングの考える）日本とアメリカでは違うということなのである。けれどもホワイティングはそのことをはっきりとは書いていない。確かに同じページには、日本の「ファイティング・スピリット」の例として、千本ノックのような過酷な練習に耐えること、一塁でヘッドスライディングをすること、といった事例をあげている。だがアメリカでは「ファイティング・スピリット」という言葉は別の行為に対して使われる。そこまで明記しないと、アメリカ人はファイティング・スピリットを表に見せるのが嫌いなクールな選手ぞろいなのか？とあらぬ誤解を招いてしまう<sup>19)</sup>。

もう一例あげると日本の春のキャンプにおける長い画一的集団的練習に対するガイジン選手の嫌悪感についてである。アメリカ人選手は練習においても自分のスタイルを貫くことを優先し、監督コーチからの画一的な練習の強制を好まない。そしてそのことに対して文句をたれる。けれども彼らが嫌うのは画一的な練習であって練習そのものではない。確かにアメリカのスプリング・トレーニングの期間は1週間程度で日本より短し、1日の集団的全体練習の時間も少ない。けれども大リーガーは激しい個人練習を熱心にやっている。ホワイティングの頭の中では区別がついているのだろうが、アメリカ人選手が嫌悪するのは画一的強制であって練習そのものではないことを明記しないとこれまた誤解の原因となってしまう（もっとも練習そのものが嫌いだから、アメリカから淘汰されて日本に来る羽目になったのかもしれないが<sup>20)</sup>。

今あげたように、文化決定論的な陥穽にはまったようにみえる部分や若干の説明不足と思われる部分はあるが、『菊とバット』が文化野球論のパイオニア的金字塔であることは間違いない。それにそもそも『菊とバット』は厳密な意味での学術書ではない。「文化野球論」の構築はまだ始まったばかりなのである。

### 3. 日本人大リーガー登場

1995年5月2日、サンフランシスコのキャンドルスティックパークの先発マウンドには、ロサンゼルス・ドジャースのユニフォームを着た野茂英雄がいた。1964年のマッシー村上以来2人目の日本人大リーガーの登場である。

野茂は高校卒業後社会人野球に進み、1988年のソウルオリンピック野球の銀メダリスト、1989年のドラフト会議で8球団から指名され、抽選の末近鉄

バッファローズに入団。新人の1990年には18勝、勝率6割9分2厘、防御率2.91、奪三振287の4冠に輝き、その年のMVPと新人王のダブル受賞と大活躍した。以後3年連続最多勝、4年連続奪三振数1位の成績を収めていたが、5年目に腕の不調もあって成績が降下。当時の鈴木啓示監督との確執もあって、1994年末任意引退を表明。任意引退後の外国球団でのプレーを禁じていなかった当時の野球協約にのっとって、ロサンゼルス・ドジャースと契約した<sup>21)</sup>。

野茂はデビューした1995年13勝を挙げてナショナル・リーグの新人王になり、またその年のオールスターゲームではナショナル・リーグの先発投手を務めた。2008年に引退するまでの(2006年、2007年は大リーグ登板なし)大リーグでの通算成績は123勝109敗、通算奪三振1,918。それ以後、連綿と続く日本人選手の大リーグ挑戦のまさにパイオニアとなったのだ。それまで輸入オンリーだった日本野球のグローバル化の始まりである。

前節でも取り上げたロバート・ホワイティングは、野茂の功績について単に大リーグで通用する本物の選手が現れた、というだけの見方はしていない。選手に一方的に不利な(とホワイティングは主張する)日本の野球システムを野茂が自らの意思で打ち破った点を高く評価し、2004年の近鉄バッファローズ消滅問題に端を発する球界再編騒動におけるプロ野球選手会の堂々とした振る舞い、代理人制度の導入やフリーエージェントの制度改革(微調整にすぎないともいえるが)にみられるプロ野球選手の自己主張の強まりなど、彼が著作で「奴隷野球」と称した旧来の日本プロ野球システムの変革をすべて野茂の行動に結びつけて解釈している<sup>22)</sup>。すなわち、野茂の決断は単なる選手移動のグローバル化ではなく、野球システムのグローバル化の端緒だと考えているのである。

日本野球のグローバル化のハイライトは、日本代表チームの2006年と2009年の2回連続のWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)優勝である。もともと定評のある投手力とあわせて機動力を前面に押し出した「スモール・ベースボール」を駆使しての優勝によって、「野球はベースボールを超えたのか」的な論調も巷に散見されるようになった<sup>23)</sup>。けれどもその後は、ドミニカ、アメリカがようやく本気を出して?2013年と2017年にそれぞれ優勝し、日本の打力不足が深刻な課題とされる状態になっている。ここでは、野茂以降の日本野球およびそれを取り巻く現象が、果たしてグローバル化を意味しているのかということについて考えてみることにしたい。

1987年7月NHKのBSは「速報大リーグ中継」という番組を始めた。最初

は現在のような形ではなく録画が中心だったが、1989年10月のプレーオフでは完全生中継が行われた。日本に居ながらにして、大リーグのスター選手やスーパープレーが堪能できるようになり、大リーグファンのすそ野は一気に広がったかに見えた。そして野茂英雄の大リーグ移籍である。すると次のような現象が起こった。大リーグが見たいのではなく、野茂が見たいというファンが激増したのである。番組編成は野茂中心となる。伊良部秀輝、長谷川滋利、吉井理人といった先発投手たちが野茂に続き、大魔神佐々木そしてイチローがマリナーズに入ると、中継の多くはマリナーズ戦になってしまった。さらに松井秀喜がヤンキースに入ると、東海岸と西海岸ではで3時間の時差があるため一日にヤンキースとマリナーズの試合が二つ中継されることも珍しくなくなった。

ここで、日本人大リーガーがまだ在籍していない1991年8月、野茂（ミルウォーキー・ブルワーズ）、伊良部（ニューヨーク・ヤンキース）、吉井（ニューヨーク・メッツ）が先発ローテーションに名を連ねた1999年8月、そしてイチローと松井がともに活躍した2009年8月のBSの番組編成を比べてみよう（これは放送予定であり、雨天中止になった場合も数に数える）<sup>24)</sup>。

1991年8月はまだ大リーグ中継は深夜枠の放映で、24試合が放送された。取り上げられた球団はアメリカン・リーグ東地区5チーム、西地区7チーム、ナショナル・リーグ東地区3チーム、西地区3チームとまんべんなく登場している。これが1999年8月になると全く様相が変わってくる。同月に放送されたのは18試合と若干減っており、そのうち野茂先発予定試合が6、伊良部先発予定試合が5、吉井先発予定試合が4、3人で合計15試合と完全に日本人先発投手中心に番組編成が組まれているのである。

その10年後の2009年8月はというと、大リーグの試合はほぼ毎日中継され、全部で37試合放送された。だが取り上げられる球団のバリエーションが増えたわけではなく、イチローのマリナーズ、松井のヤンキースの試合を合わせると25試合で全体の3分の2を占めている。そして二人ともアメリカン・リーグの所属ということもあって、ナショナル・リーグの中継はこの月は1試合しかなかったのである。確かに大リーグはBSによって身近なものになったが、日本人選手の進出後は、みんなが見たがったのはアメリカ人大リーガーではなくて、日本人選手の活躍ということになってしまった。

WBCもまた同様である。WBCは国別対抗だから仕方がない面があるとはいえ、「サムライ」とか「日の丸」とか、ことさらにナショナリズムを喚起す



るシンボルが使われる。そこでは、今年の全米オールスターの4番は誰だろうとかドミニカチームでプーホールズはどんな活躍をするだろうかといった声はあまり聞かれない<sup>25)</sup>。

日本人の大リーグ進出にしても WBC における日本チームの活躍にしても、日本のファンの目を海外に広く向けさせるのではなく、日本人選手に対する注目だけが強まった結果を生んだように思われる。野球のグローバル化はナショナルリズムを強める、という仮説をここに提示したい。

#### 4. もうひとつの海外野球

3. で見たように、日本人プロ野球選手の大リーグ進出や WBC での活躍はグローバル化とは逆のナショナルリズムのダイナミズムを生み出したとの仮説を提示した。けれども野球選手移動のグローバル化はその後も続いているのも事実である。大リーグに行った主だった選手名だけ上げても、野茂英雄、伊良部秀輝、長谷川滋利、佐々木主浩、イチロー、新庄剛志、松井秀喜、松井稼頭央、松坂大輔、岩隈久志、上原浩治、青木宣親、そしてダルビッシュ有、田中将大、前田健太、大谷翔平。

だが、海外流出はアメリカ大リーグだけではない。それまでもあった韓国・台湾といったアジアだけでなく、アメリカのマイナーリーグ、独立リーグ、中南米リーグなどへの日本人選手の進出が着実に増加しているのである<sup>26)</sup>。

海外を渡り歩く野球選手をグローバル化にともなう労働移民ととらえなおして野球のグローバル化の問題を研究している石原豊一によると、日本プロ野球(セ・パ12球団)に在籍したのちにアメリカ(含むカナダ)のマイナーリーグおよび独立リーグに在籍した選手は、期限付きの「野球留学」とその後大リーグに昇格したものを除いて、1993年から2014年の間で48名いる。そしてさらに注目すべきは、日本のプロ野球を経ないで、アメリカ(含カナダ)のマイナーリーグおよび独立リーグに在籍した選手は、同じく石原によると1995年から2014年の間で141名に上る<sup>27)</sup>。野球界におけるグローバル化というのは、単に日本プロ野球のスター選手が大リーグに挑戦するだけではない、もっと広範で複雑な現象であることがここからよくわかる。

石原豊一は「グローバル化におけるスポーツ労働移動の変容—『ベースボール・レジーム』の拡大と新たなアスリートの越境」という論文で2011年度に

立命館大学から博士号を授与されたスポーツ社会学者である。彼は、アレン・グットマン、ジョー・ベイル、ジョセフ・マグワイアらのスポーツのグローバル化、スポーツ労働移民の先行研究に依拠して「ベースボール・レジーム」という概念枠組みを構築し、アメリカ、中南米をはじめとする17か国298のフィールドにおける調査をもとに論文を完成させた。そしてその博士論文をもとにした一般書『ベースボール労働移民』を出版している<sup>28)</sup>。

石原はベースボール・レジームを「プロ野球の拡大に伴ってできた各国リーグのモザイク状に拡大するこのネットワークをベースボール・レジームという枠組みで捉えたい。このレジームとは、人材獲得だけにとどまらず、野球の普及を通じた放送網やマーチャンダイズの拡大も含めた資本のネットワーク」だと定義する。もう少しわかりやすくいうと、現在展開されているベースボール・レジームとは、アメリカ大リーグ機構を頂点とし、中南米が典型的であるが、各国リーグが、大リーグへの人材供給のための「貯水池」として組み込まれ、そこに垂直分業的な収奪・依存の構造が生まれているのに加えて、新たな「貯水池」候補として、それまで野球不毛とされた国や地域まで（例えば、中国、イスラエル、ヨーロッパ諸国）国内リーグが設立され、レジーム内で一定の機能を果たしている状況を指している<sup>29)</sup>。

『ベースボール労働移民』では、ベースボール・レジームにおいてアメリカ大リーグと完全に垂直分業の中に組み込まれてしまったドミニカ、ドミニカと同じく大リーグへの人材供給源に位置付けられながら同時に国内的アイデンティティを保っているプロリーグを持つメキシコ、野球不毛な地における特殊な事例としてのイスラエルとジンバブエ、そして日本・韓国・中国といった、必ずしもベースボール・レジーム内の垂直分業構造内にはからめとられているとはいえない東アジアのレジームとのかかわりの現状を記述し、大リーグを中心とする垂直分業構造がその本質でありながらも、上位の単なる一方的収奪に終わらないケースや、またレジームの中位や下位に位置する国・リーグといったサブシステムの同士の関係にも注意を払っている。

加えて石原は、特にベースボール・レジームの周縁から周縁へと移動する「野球労働移民」に着目し、イスラエルでの調査をふまえて、より上位のリーグに昇格することが期待されている「プロスペクト型」、上位リーグへの上昇の期待はなくプロスペクトの試合の相手（「かませ犬」といった表現も使われている）として集められている「野球労働者型」、野球不毛諸国のリーグや競

技レベルの低い独立リーグに在籍して「プロ選手」の肩書を得ることで自己満足している「自分探し型」の三類型を新たに創設している<sup>30)</sup>。

その後石原は、「自分探し型」の典型であるアメリカ独立リーグでプレーする日本人選手（その多くが自ら野球のキャリアを途中で中断したのち、再チャレンジするというケースで、当然のことながら、その大多数は高校野球大学野球の主力選手だったわけではなくプロ野球のドラフト候補でもなかった）に関心の重点を移した。独立リーグといっても、アメリカの場合千差万別で、2010年代前半では、リーグは10弱、チーム数は60前後もあり、大リーグ傘下のマイナーリーグ2Aレベルのリーグもあるが、大半を占める底辺のリーグのレベルはとてプロのものとはいえず、リーグ自体も経営不安定で集合離散を繰り返している。石原は、こうした独立リーグに参加する日本人選手を中心の題材とした二番目の著作『もうひとつのプロ野球』を発表する。『もうひとつのプロ野球』において石原は、そのような自分探しの選手たちを「ノマド・リーガークローバル化した野球界をさまよう若者たち」と名付け、彼らの状況を、日本の関西独立リーグの顛末も絡ませながら批判的に論じている<sup>31)</sup>。

学生時代に野球で完全燃焼できず、さりとて一般企業などへの就職も選択せず、「夢を追う」という大義名分でアメリカの独立リーグなどに挑戦する彼らの存在、そして彼らを支える周辺ビジネスや言説の存在を論じた『もうひとつのプロ野球』は、まさに「野球で日本社会を語っている」、いいかえると社会を語るための野球論「社会野球論」の貴重な著作だといっていいたいだろう。「自分探し」のグローバル化を野球を通じて論じた力作といってもいいかもしれない<sup>32)</sup>。だが、以下ではもう少し石原の提示した「ベースボール・レジーム」概念の可能性、そして同じグローバル化でも、ワークとしての野球という観点から少し私なりに次の展開について論じてみたい。

## 5. 野球労働者たち

野球労働者というのは、石原が『ベースボール労働移民』の中で作り出した概念である。石原は野球労働者を「頂点を目指して自己の技量を磨くというトップアスリート」ではなく、「生活の糧を得るため、野球という技能を携えて国境を渡る〈労働ディアスポラ〉」と位置付ける。野球労働者にとって「野球はもはやアスリートとしての自己を極めるツールなどではなく、単に富を生み

出す技能」であり、したがって「限界を感じて引退するようなことはなく、仕事がある限り、諸国をさまよう」と石原は述べる<sup>33)</sup>。石原は、最初から大リーガーになれるほどのレベルではないが、必要最低限のプロの技術レベルをもって、雇用のあるところ世界どこへでも、たとえ「かませ犬」的存在だとしても、プロ野球選手としての活動を続けるものを想定しているように思われる。だが、これから述べる「助っ人」と野球労働者の間には連続性がある。

野球の腕前を買われて、いろいろな国から声がかかればどこへでも行くような選手を、ジョセフ・マグワイアは「傭兵」と類型化した<sup>34)</sup>。傭兵というのは、それなりのリーグ、チームにおいて「助っ人」として高いパフォーマンスを期待され、しかるべき（場合によっては破格の）待遇が与えられる存在である（日本プロ野球における大リーグ経験者など）。だが期待に応えられなければすぐさま解雇されるのも傭兵の宿命だ。そして「助っ人」として誰からも期待されなくなれば、傭兵としての引退が訪れるのである。その時本当に選手を引退してしまうこともあるが、「助っ人」ではないまでもベースボール・レジームにおける下位リーグに転戦して報酬を得続けようとする、そこから野球労働者の道が始まるわけである。

ここでは、日本プロ野球に「助っ人」として在籍した後、野球労働者への道を歩んだ（歩んでいる）と筆者から見て思える、日本プロ野球に在籍した二人の選手をここで紹介する。一人は2008年にオリックス・バファローズに在籍したドミニカ出身のラモン・オルティズ投手、もう一人は2008年-2012年に中日ドラゴンズに在籍したマキシモ・ネルソン投手である<sup>35)</sup>。

オルティズは、オリックス入団前は5年ほどのマイナーリーグ経験を経て、大リーグのエンゼルス、レッズ、ナショナルズ、ツインズ、ロッキーズでプレーし、特に2000年から2007年までは、その時々所属チームで先発ローテーションの一角を担っていた。そしてオリックス退団後も、ドジャース、カブス、ブルージェイズで投げ、その後メキシカンリーグやドミニカのウィンターリーグでプレーを続けている。ネルソンは当初ヤンキースのルーキーリーグに在籍していたが、集団偽装結婚事件に関与したとされて解雇、その後ドミニカ・サマーリーグやイスラエルプロ野球リーグでプレーしたのち中日に入団。中日退団後の2013年以降は、ベネズエラのリーグ、韓国の独立リーグ、メキシカンリーグ、ドミニカのウィンターリーグなどを渡り歩いている。

この二人のケースが示唆するものは何か。日本プロ野球で曲がりなりにもブ

レーできれば、日本プロ野球を解雇されてもそのような選手の活動の場は世界に目を広げればたくさんあるということだ。確かにオルティズは大リーグ復帰を果たしたが、現状では年齢のこともあって(1973年生まれ)今後再び大リーグで登板する可能性は極めて低いと思われる。それでも野球を続けている彼はまさに野球労働者である。日本人選手でいえば、日本プロ野球でそれなりの実績を上げたのち、韓国、台湾のプロ野球やアメリカ独立リーグに活動の場を移した選手は高津臣吾や渡辺久信あるいは仁志敏久や渡辺俊介などの例外はあるが極めて少ない。また日本プロ野球退団後ベースボール・レジェームの下位に位置するリーグで長期にわたってプレーをした選手もほとんどいない。日本プロ野球での活躍がかなわなかった退団選手についても事情はあまり変わらない。けれども将来ベースボール・レジェーム内における選手移動がより活発になれば、セカンドキャリアを日本国内の堅気の生活者ではなく野球労働者に選ぶ日本プロ野球選手が出現することはありうる。

現在そのような選手がほとんどいないのは、レジェームの下位に位置するチームに行った場合、日本の一般の仕事とくらべて得られる収入があまりに少ないからである。高津にしても渡辺久信にしても仁志にしても渡辺俊介にしても収入を求めていったわけではない。あくまでも純粋にプレーの機会を求めて、あるいは将来に備えて見聞を広めるために行った側面が強い。けれども、現在のグローバル化が一層進行し、日本経済の低迷が続けば、日本におけるある種の仕事はAIや海外に奪われて消滅するか、あるいは更なる賃金の低下を招く可能性がある。そうなるとただでさえ再就職後のキャリア構築が困難な元プロ野球選手が、セカンドキャリアとして、日本国内の低賃金の職に就くより、たとえ独立リーグであっても同じ低賃金ならあえて国外に出てワークとしての野球を選ぶということも現実に起きてくるかもしれない。そうなる、まさにグローバル化が日本野球界を貫徹したことになり、そのグローバル化は格差の徹底的拡大と少数者だけの繁栄というグローバルスタンダード型な社会の縮図ということになるのだろう。

「自分探し型」選手についても同様である。現状においては「自分探し型」選手は以下の2点の理由で野球労働者ではないと考える。第一に生活の糧を求めて海外の独立リーグなどに参加しているのではないということである。まず収入金額が少ない。発展途上国ならいざ知らずアメリカで暮らすにはあまりに少ない金額である。金額が少ないどころではない。彼らの多くはオフシーズン

にバイトなどで蓄えた資金で食いつないでいるのである。独立リーグの中には、ほぼ無給に近い代わりに食と住は球団やスポンサーが用意するというシステムのところがあるようだし、さらには、出場料を払ってトライアウトキャンプに参加する「タックス・プレーヤー」というプロ野球選手も存在している。これではとても労働者とはいえないのである<sup>36)</sup>。

「自分探し型」が野球労働者ではない第二の理由は彼らの意識である。彼らはタテマエとしては、あくまで将来の大リーグを目指して、あるいはそこまでいなくても日本で果たせなかったプロ選手になるという目標のためにアメリカ独立リーグに参加している。野球労働者の範疇に入る選手の場合、彼らは働き場所をベースボール・レジームの下位に求めて渡り歩くわけだが、彼らにとっては、現実はともかく、あくまでレジームの中心アメリカへの挑戦なのである<sup>37)</sup>。

しかし、現在「自分探し型」の選手が、将来野球労働者型になる可能性もある。石原は自著において、「自分探し型」選手に関して、会社勤めか夢追いチャレンジかという二者択一の構図を想定しているが、グローバル化と若者の雇用環境の悪化がさらに進めば、この図式が、日本国内のブラック企業の非正規雇用かそれとも海外の底辺独立リーグかという形に変わることもありうる。そうすると、同じく不安定な低賃金労働ならば、自分の「専門技術」を生かせる海外独立リーグという選択も現実味を帯びてくるのではないだろうか。もっとも現在の「自分探し型」の若者が、「夢追い」抜きの「ワーク」として海外独立リーグでのプレーを選択するかどうかは不明だが。

いずれにしても、石原の二つの著作は、野球を続ける、ということに関する選択肢が、野球のグローバル化によって著しく拡大したことを我々に教えてくれるのである。

## おわりに―「文化野球論」の展望

この論文には結論はない。その代わりに「文化野球論」の今後の展望と可能性について簡単に私の考えを述べることにする。

前半ではロバート・ホワイティング『菊とバット』を批判的に検討したが、私が指摘する文化決定論の陥穽は、一つの現象を静態的に論じればどうしても避けられない問題だと考える。けれども時間という軸を導入すると様相が変わ

ってくる。それは野球における変化と文化変容や社会変動の関係を論じる可能性ともいえる。また日米比較にいても依然として有効性はあると思う。なぜ、野球におけるある対象へのアプローチが日米で違うのか、より焦点を絞って比較の精度を上げれば優れた研究は可能だと考える。

後半で取り上げた石原豊一の研究はより大きな可能性を持っている。現在の日本は、GDP で中国に抜かされ経済不振が長らく続いているとはいっても、エマニュエル・ウォーラースタインの世界システム論における、中心-半周辺-周辺、の構造の中では依然として中心にとどまっているとっていいだろう<sup>38)</sup>。

けれども石原の提示するベースボール・レジェームでは、中心に位置するのはあくまでアメリカ大リーグだけであって、日本プロ野球といえども半周辺に位置するに過ぎない(もちろんこのレジェームにおける位置づけは国単位ではなく、それぞれの国のリーグごとになされる。アメリカでも底辺独立リーグは当然ながら周辺である)。このことは、あまり明るい話ではないが、将来の日本のグローバル社会における位置づけを暗示するものといえないこともない。今後アメリカ(と中国?)以外の国がすべて中心から半周辺に移行する可能性もゼロではない。日本プロ野球がベースボール・レジェーム内でいかに自己の存立を確保し、またレジェーム内の垂直分業化の下での単なる従属的な選手供給の場で終わらないためにどのような生き残り戦略を立てていけるかが、今後の日本の在り方への何らかの示唆となるかもしれない。

二つのケースが示すように、「文化野球論」は将来的に豊かな可能性を秘めている。「文化野球論」は社会的有用性を追求するものではない。けれども野球が文化や社会と無縁ではありえない以上、「たかが野球」では終わらない。もちろんそこには学術的な価値もあるはずだ。そこに向けての第一歩をここに踏み出したのだ。

[付記] 大隈宏先生には、1997年度から成城大学の非常勤講師を勤め始めて以来大変お世話になっている。先生のご厚情と寛大さには感謝の言葉もない。その先生の冠論文集にこのような生煮えの試作品を提供するのは言語道断の極みといえる。しかし本論文は私の新しいチャレンジでもある。寛大な大隈先生であれば苦笑しつつも私のチャレンジをお認めくださるだろうと思い、寄稿させていただいた。

注

- 1) 「宣言」という言葉は、もちろん草野進他『プロ野球批評宣言』を意識している。草野進は文芸評論家（蓮實重彦東大教授の変名説もある）で、1980年代中盤に当時としては画期的な野球評論を展開していた。草野がそのころはやりのニューアカデミズムの影響を受けたのか、草野という名前の蓮實が書いたのか真相は藪の中だが、いずれにしても、その評論にはフランス現代思想のキーワードがちりばめられており異彩を放っていた。そして、あまりにも有名な「キャッチャーはトリックスター」というフレーズだけが独り歩きを始め、その一言だけを振りかざしてさも野球通になったかのような顔をする、エセ文化人が当時いかに多かったことか。当時の私は草野の評論に対して、選手出身が大半を占めるたたき上げ系タイプの評論に現代思想を導入すれば斬新に見えるのは当たり前で、「火縄銃で対処していた百姓一揆の討伐に核ミサイルを持ち込むようなもの」と、羨望と嫉妬を込めて揶揄したものだった。草野進他『プロ野球批評宣言』冬樹社、1985年。
- 2) ロバート・ホワイティングは1942年アメリカ生まれ。カリフォルニア州立大学、海軍情報部日本勤務を経て上智大学で学び、出版社勤務の後フリー・ジャーナリストとなる。代表作は『菊とバット』のほかには、『和をもって日本となす』角川書店、1990年、『イチロー革命』早川書房、2004年、『野茂英雄』PHP新書、2011年などがある。  
『菊とバット』初版は鈴木武樹訳でサイマル出版会から出版された。その後鈴木氏の死去と初期契約期間終了に伴い、松井みどり訳によって1991年文春文庫から再版された。そして、その後の展開をふまえて、新たな前書きと終章を加えた新版が[完全版]として早川書房から2005年に同じく松井みどり訳によって出版された。本論文が依拠しているのは2005年の[完全版]である。ロバート・ホワイティング、鈴木武樹訳『菊とバット—プロ野球にみるニッポンスタイル』サイマル出版会、1977年；ロバート・ホワイティング、松井みどり訳『菊とバット』文春文庫、1991年；ロバート・ホワイティング、松井みどり訳『菊とバット』[完全版]早川書房、2005年。
- 3) ホワイティング『菊とバット』[完全版]、15ページ。
- 4) ホワイティング『菊とバット』[完全版]、9ページ。
- 5) ホワイティング『菊とバット』[完全版]、第1章。
- 6) ホワイティング『菊とバット』[完全版]、第2章、第3章。
- 7) ホワイティング『菊とバット』[完全版]、第4章、第5章、第6章。長嶋とペレについては、同書147ページ。
- 8) ホワイティング『菊とバット』[完全版]、第7章。
- 9) スペンサーは阪急ブレーブス、バッキーは阪神タイガース、スタンカは南海ホークスにそれぞれ入団した。日本にうまく適応した彼らの所属球団がすべて関西であったことは偶然では片づけられないような気もするが、その考察はまた別のところで行うことにする。この三人については、池井優『ハロー、スタンカ、元気かい—プロ野球外人列伝』創隆社、1983年を参照。
- 10) クリート・ボイヤーの人格者ぶりについては、大洋ホエールズで通訳、のち渉外担当を務めた牛込惟浩が敬意をこめて紹介している。牛込惟浩『サムライ野球と助っ人たち』三省堂、1993年；牛込惟浩『プロ野球成功するスカウト術』宝島社新書、2000年。
- 11) ホワイティング『菊とバット』[完全版]、第8章。
- 12) 外国人選手自身が、自ら体験した文化摩擦について言及した著作の代表的なものとして



## 「文化野球論」(仮) 宣言序説

は、レジー・スミス、三沢クニ訳『管理野球なんて蹴っ飛ばせ』講談社、1985年；ボブ・ホーナー、安西達夫訳『地球のウラ側に違う野球があった』日之出出版、1988年；ウォーレン・クロマティ、ロバート・ホワイトティング『さらばサムライ野球』講談社、1991年。クロマティは本の中で、いろいろ日本について不平を述べているが、ある部分については日本文化に対して理解を示そうとしているところもある（主として野球以外のところ）。なお、クロマティの子供の名前はコーディ・オー・クロマティであるが、ミドルネームのオーは当時の王貞治監督に敬意を払ったもののだそうである。

- 13) ホワイトティング『菊とバット』[完全版]、第9章、第10章。なお、スペンサーの敬遠騒動とは、1965年、スペンサーは南海ホークスの野村克也とホームラン王を争っていたが、スペンサーがリードしていた8月半ばの東京オリオンズ戦では8打席連続で敬遠されたのをはじめ、南海との直接対決でも勝負してもらえない打席が続いた。10月の南海戦では勝負しない南海投手陣に対して、スペンサーはバットを逆さに持って打席に立って抗議の意を示した。最終的には、スペンサーが球場に向かう途中自分のバイクの交通事故でけがをしたため、野村が戦後初の三冠王の栄誉に輝いた。
- 14) ホワイトティング『菊とバット』[完全版]、第11章、第12章。
- 15) この点は、日本人の《外国人による「日本人論」好き》に通じるものがあるだろう。日本人の「日本人論」好きについては、杉本良夫、ロス・マオア『日本人論の方程式』ちくま学芸文庫、1995年、を参照。
- 16) ホワイトティング『菊とバット』[完全版]、7ページ
- 17) 日本人が生まれつき集団主義だというのは、支配者が作り出したイデオロギーにすぎないと批判するのは、オランダ生まれのジャーナリスト、カレル・ヴァン・ウォルフレンである。カレル・ヴァン・ウォルフレン『人間を幸福にしない日本というシステム』毎日新聞社、1994年。
- 18) ホワイトティング『菊とバット』[完全版]、239ページ。
- 19) ファイティング・スピリットについて補足。外国人選手はしばしば日本人選手（日本野球）はファイティング・スピリットが足りないと批判する。スペンサーの敬遠騒動で紹介したように、記録やタイトルがかかった場面で相手からそのチャンスを奪うための敬遠（タイトル争いの時は日本人同士でもやる）、あるいはピンチで強打者を迎えたときにまともに勝負しない采配、勝負どころの投球カウントで速球ではなく変化球を多投する配球に対する批判としていわれる言葉である。対外国人選手の場合でいえば、阪神で三冠王に2度になったランディ・バースが、1985年に王貞治のシーズン本塁打日本記録55本に並ぼうとしたときの、巨人投手陣による敬遠騒動が典型的である。バースに関しては、ランディ・バース、平尾圭吾訳『バースの日記』集英社文庫、1991年、を参照。

ただし、勝負所で変化球やボール球を投げる配球に対する批判は、強打者目線に立った一方的な物言いで、そのような場面で自分の好きな速球を投げさせるための駆け引きである場合も少なくない。大リーグでも、通算216勝を挙げたナックルボーラーのチャーリー・ハフは、変化球は「メンタルなチャレンジ」だと言っている。

ついでに言うと、ヘッドスライディングとファイティング・スピリットは何の関係もない。なぜか高校野球では最後の打者はゴロアウトの場合1塁にヘッドスライディングするのがお約束になっているようだが、内野ゴロの場合1塁はタッチプレーではないのだから駆け抜けたほうが早いというのは昔からさんざん言われていることだし、通算1,065盗塁

の日本最高の盗塁王福本豊もヘッドスライディングは危険だからやるべきでないと強く主張している。福本豊『走らんかい』ベースボールマガジン社新書、2009年。

- 20) 春のキャンプの練習に関しては、ホワイトニングが示唆するように、大リーガーも1977年当時はそれほど練習しなかったのかもしれない。大リーグ最多の通算5,714三振奪取、ノーヒット・ノーラン7回達成、通算324勝の大投手ノーラン・ライアンによると、1970年代初めくらいまでの春のキャンプのピッチャーの練習といえば、投げ込むこと走り込むこと（投球数は明記していないがあまり多くなさそうである）だけでウェート・トレーニングをやるものはほとんどいかなかったようだ。ノーラン・ライアン、トム・ハウス、斉藤信太郎+川島英夫訳『ノーラン・ライアンのピッチング・バイブル』ベースボールマガジン社、2010年、12ページ。
- ただし、野球の練習と体づくりのトレーニングは区別して考えたほうがいいのかもしいない。17歳で単身渡米し、独立リーグ・マイナーリーグを経て大リーグに昇格して通算16勝を挙げた（その後日本のオリックス・バファローズでも通算5勝）マック鈴木は、春のキャンプについてではないが、次のように言っている。メジャーの選手はシーズンが終わったら2週間程度休養し、それからキャンプ開始まで週5~6日のトレーニングを行って「体の貯金」を行い、この貯金で次のシーズンを賭っていくが、日本のプロ野球、特に二軍は、シーズン終了後の練習が少し長いと思う。マック鈴木『漂流者』三交社、2014年、155-156ページ。
- 21) 野茂英雄の大リーグ移籍をめぐる経過については以下を参照。ロバート・ホワイトニング『野茂英雄-日本の野球をどう変えたか』PHP新書、2011年；ロバート・ホワイトニング『日出づる国の「奴隷野球」-憎まれた代理人・団野村』文藝春秋、1999年；団野村『交渉力』角川 One テーマ21、2007年。なお、当時の野球協約においては、任意引退手続きを行った選手は、元所属球団の承認がない場合は日本プロ野球の場合元の球団しか復帰の道がなかった。ただし、任意引退手続き後、韓国プロ野球に入団した前例はある。
- 22) このようなホワイトニングの解釈については、ロバート・ホワイトニング『イチロー革命』（その後若干の加筆訂正を行い『世界野球革命』というタイトルで文庫化した）を参照。ロバート・ホワイトニング、松井みどり訳『イチロー革命』早川書房、2004年；ロバート・ホワイトニング『世界野球革命』ハヤカワ文庫NF、2007年。
- 23) 例えば、佐山和夫『日本野球はなぜベースボールを超えたのか-「フェアネス」と「武士道」』彩流社、2007年。佐山は本の副題からもわかるように、技術や戦術のレベルで日本の優位を論じているのではない。ただし「フェアネス」はともかく、野球はそもそも「武士道」精神のないアメリカで生まれた競技なのだから、このような尺度で日米それぞれの野球のあり方を比較して論じるスタンスには筆者は疑問を感じる。
- 24) 『読売新聞縮刷版』1991年8月、1999年8月、2009年8月。
- 25) アルバート・プーホールズは現在の大リーグを代表するドミニカ出身の強打者。2001年セントルイス・カーディナルズでデビュー（イチローと同期!）、2012年FAでロサンゼルス・エンゼルスに移籍。2001年新人王、2005年、2008年、2009年とMVP3回。2017年終了時点で、通算安打は3,000本目の2,968本、通算本塁打は614本。なお、2018年からの大リーグ挑戦が決まった大谷翔平は、プーホールズと同じチームに入るわけだが、プーホールズが近年勤めていた指名打者を大谷に譲るといったことが噂されている。
- 26) 韓国プロ野球創成期に海を渡った在日韓国人選手たちに関する古典的記録としては、関

「文化野球論」(仮) 宣言序説

川夏央『海峡を越えたホームランー祖国という名の異文化』朝日文庫, 1988年, があげられる。また大島裕史『韓国野球の源流ー玄界灘を超えたフィールド・オブ・ドリームス』新幹社, 2006年, も参照。

- 27) 石原豊一『もうひとつのプロ野球ー若者を誘引する「プロ野球」という装置』白水社, 2015年, 118 - 121, 129 - 134 ページ。石原によれば, 日本プロ野球を経ずしてアメリカのマイナーリーグや独立リーグに渡ったもののうち, 成功者とみなせるのは, 大リーグに昇格したマック鈴木と多田野数人(二人とものにドラフトを経て日本プロ野球でプレー), 大リーグではプレーできなかったものの, 日本プロ野球にドラフトで入団して活躍した巨人の山口鉄也(育成選手指名)と西武のGG 佐藤の4人だけである。なお, 本論文では, 日本プロ野球といった場合, 日本プロ野球機構に所属するセントラル・リーグ, パシフィック・リーグのチームだけを指すことにし, いわゆる独立リーグは給料をもらってはいるが, プロ野球とは呼ばないことにする。そもそも給料が払われない野球, たとえ給料が支払われてもシーズン中でもアルバイトしなければいけない野球, 後述の「タックス・プレーヤー」のように出場料を払って参加する選手が混じる野球は, たとえ自称「プロ野球」であっても, セミプロと称すべきものだと考える。

石原と正反対の立場から, アメリカ独立リーグへの挑戦者に好意的な視点で書かれているのが, 宮寺匡広『NPB 以外の選択肢ー逆境に生きる野球人たち』彩流社, 2017年。なおこの本の著者宮寺並びに, この本で取り上げられているアメリカ独立リーグに挑戦した選手のうちの数名は, 石原の『もうひとつのプロ野球』の中で, 仮名で登場する。
- 28) 石原豊一『ベースボール労働移民ーメジャーリーグから「野球不毛の地」まで』河出ブックス, 2013年。グットマン, ベイル, マグワイアの研究対象は, 野球だけではなくサッカー, バスケットボールなど多岐にわたっている。先行研究については, 石原『ベースボール労働移民』15 - 19 ページ。
- 29) 石原『ベースボール労働移民』21 ページ。
- 30) 石原『ベースボール労働移民』121 - 129 ページ。
- 31) 注22参照。なお「ノマド・リーガー」については, 石原『もうひとつのプロ野球』第5章参照。
- 32) 石原は, 「自分探し」のグローバル化について, 作家下川洋治の言葉を用いて「そこもり」と表現している。石原『もうひとつのプロ野球』151 ページ。
- 33) 石原『ベースボール労働移民』124 - 125 ページ。
- 34) 石原『ベースボール労働移民』18 ページ。
- 35) オルティズとネルソンの経歴については, ウィキペディアを参照した。
- 36) 食住の球団などの提供の例は, 石原『もうひとつのプロ野球』205, 223 ページ。タックス・プレーヤーについては, 石原『もうひとつのプロ野球』169 - 170 ページ。トライアウトリーグについて, 石原は以下のように説明している。アメリカの底辺独立リーグでは選手のレベルが低いのでまともな興行としては成り立たず資金不足になる。そこで出場料を徴収して, プロ野球体験をしたい人間を集めてプレーさせる。スタンドからだけでなくフィールドからも収益をあげるというアイデアである。タックス・プレーヤーはこの典型である。けれども観客からの入場料と, 選手からの出場料を同時にとってしまえばプロ野球ではなくなってしまう。そこで短期のプロリーグと, もう一つ出場料を払った選手が参加する「トライアウトリーグ」という二本立てのビジネスモデルができたというのであ

- る。石原『もうひとつのプロ野球』175 - 176 ページ。
- 37) 石原は、彼らの行動について「下流社会への「降竜門」と表現している。石原『もうひとつのプロ野球』第11章。
- 38) エマニュエル・ウォーラーステイン，川北稔訳『近代世界システム』I・II 岩波現代選書，1981年；エマニュエル・ウォーラーステイン，川北稔訳『史的システムとしての資本主義』岩波現代選書，1985年。